

朝起きて、シャワー浴び、歯を磨いて、お湯を沸かしてコーヒーを入れ、トーストを焼いて、机に向かって書き始める。疲れたり息詰まると、ピアノの練習をして、英語のアプリを少しだけする。移動の間や、時間が空くと本を開く。固定曜日にはアトリエへ行き、掃除、草むしり、俳優との稽古。夜はなるべく予定を入れず家で過ごす。

これらが今の自分の全てのように思える。希望も絶望もなく、日常を作り、繰り返す。そのことが今の自分を支えているようにも思える。その日ごとに自由を与えられ、何をするのか、何をすべきか考え、意思決定するのはかえって不自由にさえ感じる。

だからというわけではないが、稽古場へ行って、決まった方法、リズムで体と対話をしている俳優やダンサーの姿をみると安心感を覚える。

地下鉄を降りて、劇場近くのコンビニでお昼を買い劇場へ。やはり、真吉が稽古の準備をしている。ロビーで昼食をとりながら、レポートの続きを書き始める。今日からは毎日更新になるから、スピード的に追いつくか心配になる。もっと文字数を絞って、凝縮して書けたら良いのだけれど、今の自分にはそんな技術はないようで、思考を垂れ流すような文体になっている気がする。

自分が文体として、衝撃を受けたのは小説家・大江健三郎氏の言葉で。特に初期の「死者の奢り/飼育」は短編でありながら、限られた文字数やページ数の中に凝縮された言葉と質感にあふれたイメージには唖然とした。彼の小説に描かれた人間は、どこかで社会や人間関係に注目しているというよりも、人間の動物性や強調されているように思う。今の世代の作家にはない野生的、或いは自然的な人間像を目の当たりしたという感じであった。

今日の真吉のパフォーマンスには、そんな人間と動物のあいだにある、独特な空間を感じさせるナニカがあったように思う。パフォーマンスは二度ほど行いブラッシュアップされる。人間の姿から鶴の姿へと変わっていく時間、部屋の中で機織りを繰り返すことで、織り込んでいる鶴と織り込まれた鶴がセパレートしていく観念、イクツモノ時間や精神世界が同時に存在し、最後に全ての羽を失った丸裸の鶴が目の前にポツンと残される。

個人的には最近の文学や現代劇、メディアアートは人間社会を前提とされ過ぎていると感じている。表現から肉体や自然、動物性や精神性を感じるものが少ないので、今回のパフォーマンスで鶴と人間の恋の物語を想像すると同時に、改めて人間の動物的な一面を意識する。言葉に頼った人間の感情表現と、動物的な感情表現。その二つが微妙に交差する。

次は五味さんの語りパフォーマンス。

客席から少し離れた舞台上に座布団と一人の男。男は鶴女房のあらすじを観客へ説明する。男の座布団からこちら側が海となり、観客たちは遠くの浜辺にいる男のつぶやきに耳を澄ませる。こちらの浜辺からみえる男の姿は時々霞んで見える。喋っているようで喋っていない。動いているけど動いていない。若者のようで年寄り。年寄りのような若者。広い宇宙の中を一人の男の言葉が、風景が揺らめいている。無音の連続の中で語られる鶴女房は、鼓を打ったあとの余韻のように静かに世界を形作る。広い劇場空間の中で、深まる個人的な体験は幽玄的であった。

夜は鯖のお弁当とゆでたまご、ポテトサラダをいただく。

その後、いくつかの課題、表現手法を探る三種のパフォーマンス、のちディスカッション。

演出家より新しい構成のプレゼンテーション。

今日のふりかえり。

体験する時間、ディスカッションの時間。頭で考え体に問う。繰り返しの中で作品のイメージが広がり、深まり、洗練されていく。言葉になかったこと、形になっていなかったものに形が与えられ、他者と共有可能なものになっていく。

自分は明日も変わらず劇場へとむかうだろう。